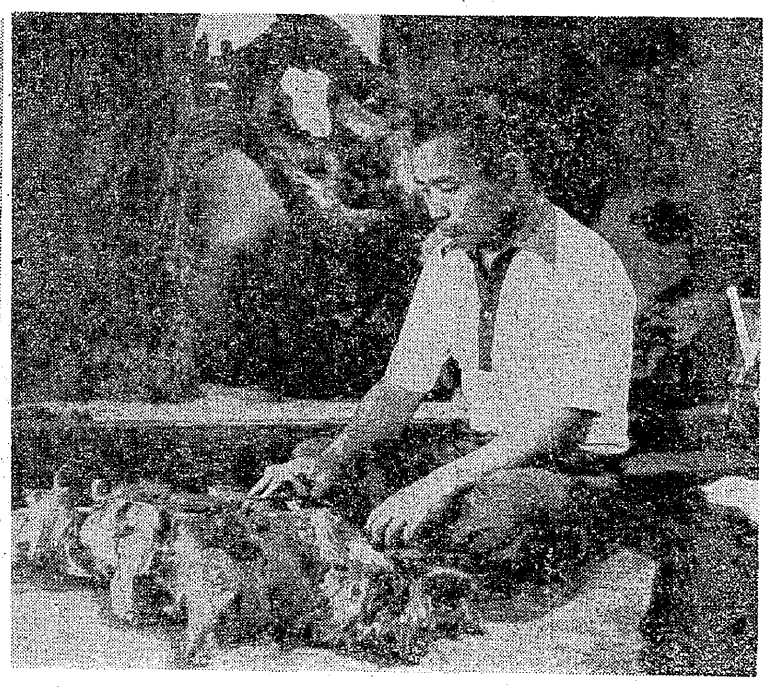
原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第百四十七号



写真上は、古木の根を採集してきては次々に磨きあげ、素晴らしい置物に。今は夢だ。ただ愛撫しながら、昔をしのぶばかり。左の写真は、三池闘争のときの雄姿。行動隊員だつた。

原告団レポート

CO患者――本　袈裟助さん

鍋は幾つも黒こげに

踏みたくってやりたい気持をこらえながら

「黙っているのが一番」と妻

不安な日々

CO患者の本袈裟助さんは、同じCO患者でも、あの三池大災害に被災した患者ではなく、昭和四十二年の九月二十八日に、同じ三川鉱で起きた坑内火災のとき被災した患者である。

もちろん今も、彼にはCO中毒症が歴然としてその爪跡をとどめている。だが、労働省はすでに三池労組に対し、彼に対する労災補償をきたる十二月以降打ち切る旨通告してきている。例によって「症状が固定した」、というのがそのロ実なのだが、そうなると彼はもはや、これまでのように仕事を休みながら安心して治療を続けていくことができなくなる。

十二月から先を、果たしてどう生きていけばよいのか、また、たとえ労災補償を打ち切られても、避けられぬ治療をどう続けていけばよいのか、しめつけてくる重なる不安に、彼は心をよじらせている。

家庭環境

CO患者＝本袈裟助さんは、昭和十年一月三十日生まれ。四十四歳だ。四十四歳といえば、人生でまさに男ざかりの季節。普通なら、くる日もくる日も、CO中毒症に身をさいなまれながら、このようにいたずらに症養生活で打ち過ずことだけに安住できるはずがない。彼自身また、くり返しくり返しいうのである――「とにかく悔しかです。このままで一生を終るようなことは、絶対にしたくなかです」、と。

彼は、大牟田市小浜町四十八番地の、小浜北社宅の三棟に親子三人暮らし。

美人の妻の名は美佐子さん。昭和十四年五月八日生まれで四十歳。CO患者の夫を抱えて、家計を維持していくため十年近くも、市内の某スーパーのなかの売り場に立ってきた。

結婚は、昭和三十七年三月十五日。本さんが二十七歳、彼女が二十三歳のときだった。

女の子が一人。由珠美さんという。二人が結婚してからちょうど一年めの、翌――三十八年五月九日に誕生。十六歳。今年から高校生だ。

坑内火災

本さんは払採炭工で、そのとき三番方に出勤していて被災した。

坑内火災は、前記したように昭和四十二年の九月二十八日、午前五時三十分ごろ、三川鉱坑底のゼロ片材料線坑道で起きた。

三池労組の機関紙〝みいけ〟（昭和四十二年十月一日発行の八百三十一号）に、このときの三川鉱坑底の恐るべき状態を、なまなましい筆致で伝えた一つの手記がある。本さんと同じように、このとき被災した労働者の一人――柳田秀吉さんのもので、彼はそのなかで報告している。

「坑道が消えている。黒煙が坑道一ぱいに立ちこめ、詰へ詰へと流れているではないか。爆風がないところを見ると、坑内火災だなと感じた」

「側を歩いている同僚の姿も、煙でまったく見えない。誰かが、かすれた声で叫んだ。『もう駄目だ』……」

「虫ケラと一緒にされて死んでたまるか。差別で苦しめられた上に、殺されてたまるか。俺は労働者である前に、一個の人間だぞ。死ぬのはごめんだ。非人間的な奴等を、俺は許すことができない」

あの三池大爆発からわずか四年目に、しかもまったく同じ三川鉱の坑底で起きた坑内火災は、またしても、三池労組員だった上村孝知さんをはじめとする七人もの労働者の命を奪い、四百二十五人という大量のCO患者をつくり出すほどの大災害となったのだった。命だけはかろうじて助かったもののCO患者になってしまった彼は、その日を峠に、がらりと人間が一変してしまった。

日々の現実

「毎朝、六時前には必ず目が覚める。八時に起きて散歩。体調がよいときは、速足で歩くこともある。日中は、病院にいくほかは遊びに出たり、裏庭の掃除などして過ごす。そしてお陽さんがはいると、また散歩」

一日の日課を、彼はこう語る。この言葉通りでありさえすれば、きわめて平穏に、彼の家の日々は過ぎているとしか思われぬ。だが現実は――。

「被災してからは、何かにつけすぐカッとなって、手当たりしだいにものを投げつけるようになりました。

それに相手かまわずでしょう。子どもは娘だもんですから、傷負わされてほと思って、ついロごたえでもすれば大変です。すぐ、顔いろが変わるんです。

ある日のこと、あ、くるな、と察しましたから、さっと戸外に逃げ出して、玄関のガラス戸を閉めたのといっしょでした。見てください（と指さしながら、続けて）あそこのガラスがバーンと割れて飛び散りました。後でわかったのですけど、逃げる私に向かって、主人が紙バサミを投げつけたのでした。

黙っているのが一番、ときめているのですけど、勤めの仕事がいそがしかったり、ほかのことで疲れたりしますと、ついロごたえしてしまうのです」

彼の家をたずねた日のこと、右のように妻の美佐子さんが語るのに、彼は彼で、きまり悪そうに恐縮しながら、いった。

「鬱り日や、人の出はいりの多いときなんか、理由は何もないとわかっていても、頭が痛み出してきます。すると、気持までがイライラし出してくる。たまらなくなってきて、そこらじゅうにあるものを、手当たりしだいに投げつけたくなってくるんですよ。自分でいくらおさえよう、おさえようと思っても、なぜかおさえることができんとです」

「おかげで子どもは、それが父親の病気だとちゃんと心得ているもんですから、夜などたとえ親子いっしょにいるときでも、予感がするときっさと二階の自分の部屋にあがっていってしまいます」

美佐子さんの言葉に、彼は頭をかいた。

緊張の日々

もの忘れもひどく、火の始末が頭痛のタネだ。夕食などの準備をしてくれるのはうれしいが、ガスをつけっ放しにしたままフロに出かけていったり……。そのため空炊きとなり、もう幾つ鍋をダメにしてしまったことか。

娘は高校。妻は勤めで帰りが遅い。いつとも知れず、夕食の準備は本さんの役目になってきた。

いやでも、食卓に並べられたものは食べなければならない。いやな顔でもすれば、結果は知れているからだ。

「娘の奴、学校から帰ってきます。私が炊事場に立っていますとそこへ、『お父さん、今日のおカズは何？』とやってくるんです。そしてぐつぐつ煮たっている鍋のフタをとって、『ウエーッ』とやっとるとですたい。ハハハハ」

彼は笑うが、そんな彼に娘の由珠美さんは「お父さん、おこづかいはあげるから、どこか泊りがけで旅行にでもいってきたら」と、しきりにすすめるよし。「娘も、幾らかの貯金はできているもんですから」、とは美佐子さん。

ときには心臓発作に襲われて、七転八倒しながら苦しむ本さんにおろおろさせられたり……。毎日が平穏どころか、瞬時も息のつけない、緊張の連続。のがれようなき、この一家の生きざまである。

燃える怒り

三池闘争のとき、彼は行動隊員として常に闘いの先頭に立って、また写真班員としての特別の任務を果たしては、注目すべき作品も残している。

多芸多趣味で、書、置物造り（木の根を磨いたり）、猟、ハク製などなど。家族キャンプ行を楽しんだこともあり、何をするにも頼もしい人間だった本さん。それをこれほども廃人にされてしまったのだ、どうして怒りの火の燃えあがらぬはずがあろう。

「会社の幹部どもを、踏みたくってやりたい気持を、私はやっとおさえとるとですよ。会社が、どんなに保安対策を手抜いてきていたか、坑内で働いている者が一番よく知っています。絶対に許さんですよ」

そういってCO患者＝本袈裟助さんは唇を固く食いしばった。